

第6回 京都市子どもの豊かな心と規範意識を育む関係者会議 摘録

- 1 日 時 平成28年9月23日（金）15時30分～17時30分
- 2 場 所 京都市教育相談総合センター 会議室
- 3 出席者 梅山・大林・小槻・柴原・諏佐・千賀・高橋・田中・中条・中東・中村・永本・西田・萩山・藤田・舟木・村岡・室・安見（委員は50音順，敬称略）
- 4 内容
 - (1) 開会，挨拶，委員紹介，本関係者会議について
 - (2) 説明・取組報告・協議
 - ・京都市のいじめの状況等について
 - ・京都市の不登校の状況について
 - ・子どもの豊かな心と規範意識を育む実践紹介
 - ①中京もえぎ幼稚園の実践より 「折り合いをつけ，気持ちを調整する力」の育成について
 - ②京都市中学校生徒会サミットについて
 - (3) 閉会

京都市のいじめの状況等について

（事務局からの説明）

- 矢巾町の中学2年生が自殺した事案を受け，文部科学省から平成26年度のいじめの認知件数の見直し依頼があり，いじめの認知についての考え方，見直しに当たり留意すべき点が示された。
 - ・ いじめは，社会性を身に付ける途上にある児童生徒が集団で活動する場合，しばしば発生するものである。
 - ・ 初期段階のいじめであっても学校が組織として把握し，見守り，必要に応じて指導し，解決につなげることが重要である。
 - ・ いじめの認知件数の多い学校について，「いじめを初期段階のものも含めて積極的に認知し，その解消に向けた取組のスタートラインに立っている」と極めて肯定的に評価する。
 - ・ 初期段階のいじめや，ごく短期間のうちに解消したいじめ事案についても遺漏なく認知件数に計上すること。
 - ・ 対人関係のトラブルと捉えていた事例の中に，いじめと認知すべきものがあつた可能性を踏まえ，慎重に確認すること。
- 文部科学省が10の自治体を抽出し，18者に4つの事例でいじめと認知するか否かを照会したところ，ごく短期間にいじめが解消した事案について，自治体間で認知のばらつきがあつた。
- 本市では，校長会，生徒指導主任会，生徒指導部長会，補導主任会等で検証を深め，悪口，嫌がらせ，冷やかし，いたずら等についても，いじめとして考えていこうと進めている。
- 本市では，小学校，中学校ともに最も多いのは「冷やかし・からかい」である。小学校ではこれに「物を隠す」，「軽くぶつかったりする」が続き，中学校では「軽くぶつかったりする」，「物を隠す」が続く。

- 今年度は、いじめを積極的に認知することで認知件数が増加することが見込まれるが、肝心なのは認知件数を上げるのではなく、いじめを迅速かつ適切な対応をして速やかに解消を図ることと、再発防止、未然防止を図ることだと考える。
- 加えて、教員一人が抱え込まない、教員一人で判断しないことで、学校で情報・認識を共有し同じベクトルで行動していくことを学校現場に発信していきたい。
- 今年度のいじめ防止啓発パンフレットは、書き込みやすい紙質や読みやすいサイズに改良した。また、高校生用は違法薬物に関する内容も盛り込んだ。

(委員からの主な意見)

- 【千賀委員】 事務局からの説明がなければ、これだけいじめがあるのかと驚いていたところであった。積極的にいじめと捉えて先生が報告していくのは本当にありがたい。小さなことから大きくなる。ほころびをどう気にかけるかが大事であり、この事実を保護者に広げる方法を考えていただければと思う。
- 【村岡委員】 いじめの捉え方が変化してきている。「いじめのない学校が良い学校である」という認識が保護者にはまだまだある。学校運営協議会等で説明すると理解いただける。全保護者の前で話す機会は少ないので、普段からの家庭訪問が大事になってくると思う。
- 【田中委員】 嫌なことをした子がいて、周りの子どもたちがメモを回して皆で無視するという行為を教師が発見して、いじめであると注意したら、その子どもたちはいじめとの認識がなかったので叱られてショックを受けた、という話があった。小さなことでも、最初に注意をすれば大きくなる前に行為を止めることができるので、大事なことだと思う。
- 【中東委員】 文部科学省の示した事例で、保護者がいじめを訴えたもののいじめの事実が確認できないものがあるが、学校と保護者との関係ではなかなか解決が難しい事例だと思う。そこに学校、保護者とは違う立場で入ってもらえるようなシステムがあればと思う。
- 【舟木委員】 3月に「いじめはアカン」という動画を youtube にアップしているので、見ていただいて、家庭でも話題にしていいただければと思う。

京都市の不登校の状況について

(事務局からの説明)

- 平成26年度の不登校児童生徒数は小学校では168人で全児童の0.27%、中学校では785人で全生徒の2.57%である。発生の割合としては、全国を若干下回っている。
- 欠席日数は、小学校では比較的短い、中学校では欠席が長期化する傾向にある。
- 小学校・中学校ともに不登校児童生徒数は微減傾向にあったが、ここ数年全国傾向と同様に増加の兆しを示しており、集計中ではあるが平成27年度は本市でも増加が見込まれている。
- 小学校では、不登校のきっかけは、本人に関わる問題、例えば不規則な生活で昼夜逆転、不登校が継続する理由は家庭の事情、例えば家庭が不登校を容認する等が多い。
- 中学校では、子どもの不安など情緒的混乱によるものが最多で、次いで本人に関わる問題が続くが、無気力が原因であることが増えてくる。

- 本市のクラスマネジメントシートによると、仮説ではあるが、友人が少なく、学力が低い、両方の条件を満たすと学校に行きづらくなる傾向にあると分析している。
- 学校に行かなくてもよいという考え方は、フリースクール等の学校以外の選択肢が増えていることも影響していると思う。本市の場合は、不登校特例校や適応指導教室等の取組により不登校に対する理解は一步進んでいるのではないかと思う。
- 休み始めた子にどう関わるか、また、休まないためにまずどう取り組むのか等、施策も盛り込んで役立つように作成を検討している登校支援ハンドブック等により取組を周知徹底したい。

(委員からの主な意見)

- 【中東委員】 本校でも不登校を経験している子どももいるが、集団の中に入りたくない、やる気がないかと言えば、そうではない。違う立場の人が入ることで解決の糸口が見つかる場合もある。どうやって道を開いてあげるかが大事なかと思う。
- 【田中委員】 保護者の意見として、無理して学校に行くことはないのではないか、というものがある。地域や関係団体から「こういう取組があるよ」という情報があれば、保護者も学校を信じて繋がりやすいと思う。
- 【室委員】 全国でも数少ないが、京都の私学では「修学支援相談センター」を開設し、3年目。不登校、いじめの相談も増えてきている。

子どもの豊かな心と規範意識を育む実践紹介

①中京もえぎ幼稚園の実践より 「折り合いをつけ、気持ちを調整する力」の育成について

(永本委員からの説明)

- 幼児は自分の思いと違うことがあると、折り合いをつけることができず自分勝手な行動をすることがある。そのような子どもがどのようにして自分の気持ちに向き合い、葛藤し乗り越えることができるようになるのか、どのような保育者の援助や環境構成が大事になるのか探りたい等の思いから、国立教育政策研究所「教育課程研究」の研究指定、京都市教育委員会「豊かな学びリーディングスクール」研究指定をうけ、「幼児が自己を発揮しながら人と折り合いをつけ、気持ちを調整する力が育つための教師の援助や環境の在り方を考える～自立心・自律性が育つようにするための教育課程の編成を通して～」の主題で実践研究に取り組んだ。
- まず、ありのままの子どもの姿を受け止めようということから、子どもたちのエピソードを集めていく中で、幼児の「折り合う7つの姿」と「気持ちを調整する発達の視点」が見えてきた。
- また、3歳児、4歳児、5歳児と折り合う姿が右肩上がりに発達していくのではなく、どの場面でも保育者と折り合う場面が出てきたり、みんなの中で折り合えたかなという子が、年齢が上がって担任や仲間が変わって、また保育者と折り合うことから始めたりと、ジグザグジグザグと成長していくことが見てとれた。
- 幼稚園では、初めからルールありきでやるのではなく、例えばゲームをする場合も最低限だけのルールを決めて、それ以外は子どもたちが自分たちで気付いていくようにし、担任はそれを見守っていくというようにし、子どもたちが折り合っているようにしている。

- 幼稚園で折り合う経験を積んできたことは小学校にも繋いでいくことが重要であるとする。例えば、この子は一見しっかりしているように見えるけど、元々はとても繊細な子どもで、小学校で張り切った姿を見せるかもしれないけど幼稚園ではこんな風に葛藤する姿があった、というようなことを小学校にお話しさせていただいている。

(委員からの主な意見)

【柴原委員】 会議のテーマである子どもの豊かな心と規範意識を育むうえで、幼児期段階での関わり方は、国際的にも大事だと認識されている。

【諏佐委員】 伏見南浜小学校に赴任してまず印象に残ったのは、塀や柵で小学校と幼稚園を区切っていないことで、校庭がつながっていて幼稚園の子どもたちが小学校の砂場で一緒に遊んでいたりと、卒園した小学生が幼稚園に癒してもらいに行ったりする姿を見ることができた。幼稚園で良い思いを抱いた子どもが小学校でしんどくなって、幼稚園で癒してもらっている様子を見て、我々も幼児教育に関わることができればと思うようになった。

幼稚園の子どもを知りたい、子どもに知ってもらいたいという思いから積極的に幼稚園を訪問するうちに、幼稚園の子どもへの関わり方が小学校と随分違うことも分かるようになり、小学校と幼稚園で積極的に交流するようになった。そして、そうしているうちに、園児の保護者からも小学校に進学するうえでの心配事等の相談を受けるようになった。

②京都市中学校生徒会サミットについて

(事務局からの説明)

- 今年度は、中学校の生徒160人、教師100人に加え、小学校の児童と教師が35人参加し、約300人が参加した。来年度については3年に1回の中学校生徒会議を開催する予定である。
- 今年度のサミット宣言では、昨年度の大麻事案を受けて、「大麻を使わない、使わせない。自分のために、自分を大切に思ってくれている人のために。」の項目が追加された。

(委員からの主な意見)

【舟木委員】 サミットを見学して、子どもたちの間では薬物が身近ではないという話もあったが、現状は、非常に悪化している状況である。京都府内で27年中に違法薬物を乱用して検挙された未成年の数は17人だったが、平成28年は半年の時点で既に17人に達している。こと大麻に関しては昨年検挙された未成年が11人だったが、今年は半年で既に13人に達しており、全国的にも同様の傾向である。検挙数でこれだけなので、検挙されていない者がいることを考えれば非常に薬物乱用が蔓延しているのではないかと思う。

また、高校生用のアンケートの数値を見ても、大麻に対する正しい知識が子どもたちに伝わっておらず、それが蔓延の要因になっているのではないかと思う。